

マルメ研修を修了して

私は幸運にも第1回目の参加をすることができ、今回は2回目のマルメ研修でした。9年が経過し歯科医学や講義の変化、自身も経験を積み、立場も異なる今はどう感じるかを期待していました。講義で明確になった仕事のテーマ、キャピテーションシステムの利点など多くを得ました。特に「砂糖と加齢」というテーマを通じ、日々診療の中で感じていた口腔は命の入り口、最初に変化が現れ、この段階で患者さんが健康であるための意識と行動を変容できれば、その人は虫歯だけでなく口腔の健康、全身の健康が変化すると確認することができました。9年の間に参加者も若い先生が増えましたが、残念な事にポー・クラッセ先生も他界され、歯周病科教授（ダグラス・ブラッター先生のお奥様）も退任されており、荘厳な講堂に入ると「時は流れる」と感じました。懐かしい先生方との再会は嬉しく、変わらないマルメ研修へのお心使いに、本質を見失わなければ、時代に合わせ続けていくと感じました。これ迄は10年先をイメージしていましたが、最近に変化し20年先に歯科医療界の中心となる後輩達と仕事をする事の意味を考えています。全く価値観の異なる世代と対話をする中で、ある事が浮かびました。伊勢神宮が式年遷宮を迎える際、40代が中心となり、60代がアドバイスを、20代は見習いの立場で仕事を見て覚えるという日本の伝統文化を、ふと思い出したのです。また、渋谷先生の御講演で知った「2035」、イノベーションの20年サイクルを思います。オーラルフィジシャンは哲学が最も大事で、「できない」ではなく、「どうすればできる」、「何をすべきか」を常に考え「継続する」のです。日本の歯科医療の疑問、海外から受けている日本の歯科医療技術の評価との矛盾。「イノベーション」は他者と意見が合わない時は苦しいものですが、反面、どうして必要なのか明確になってきます。今、自分の所に来てくれた患者さんが幸せになるために歯科医療を通じ協力できる事、そういう自分を肯定し、歯科医療従事者としてコミュにティーへ参加できる事は幸せな事です。このような機会に恵まれている事に感謝しマルメ研修の感想文とさせていただきます。

勤務医 大貫佳鼓